

「発達障害について思うこと」

神奈川県立こども医療センター 総長 山下純正

私は小児神経外来を永年にわたり担当しておりました。今は管理職に専念しておりますので、やや時代遅れの見解になるかもしれませんが、あえてこの題で書かせていただきます。発達障害が世の中でここまで注目されるとは、かつては思ってもいませんでした。また、今や医師によって考え方も様々で、児へのかかわり方も多様になっているように思える昨今です。

25年ほど前に「学習障害の脳メカニズム」の研究に取り組んだことがありました。今から思えば大それたテーマを選んだものだと思います。左右半球間の優位性が発達と共に、そして疾患と共に違いが見られることがわかりました。お茶の水の瀬川クリニックに短期間勤務したこともあり、故瀬川昌也先生の薫陶も受けたせいでしょうか、私は神経学的に発達障害を考えてきたように思います。こどものはいはいをじっと観察したり、手を振りながらの歩行状態に問題がないか、言語や音声に関して神経機構は整っているかなど、興味が尽きない日々を思い出します。

現在は、遺伝子の時代を迎えて、それも全エクソーム解析が容易に可能になってきています。ただ、遺伝子の異常が次々と見つけ出されますが、レット症候群やアンジェルマン症候群のように臨床症状と驚愕の一致をみる場合がある一方で、神経症状との関連が不明確な症例も多々見られます。今後の医学の発展に期待したいところです。これからは、分子機構がわかることによる様々な恩恵にあずかれることでしょう。

発達障害の本筋からやや外れますが、てんかんの患者さんも多く見てきました。近年は新しい抗てんかん薬が次から次へと手に入るようになり、治療の選択肢が増え、患者さんには恩恵になっていると思います。また、けいれんが抑制されると日常の行動面にも落ち着きと安定性が見られるように思い、てんかんを併発している発達障害の患者さんには朗報と 생각합니다。

現在は直接的には患者さんとはかかわっていませんが、これからも広い見地からその人らしく生きることを支援していきたいと思っています。